

第2章 京都大学医学部構内AM20区の発掘調査II

千葉 豊 伊藤淳史 笹川尚紀

1 調査の概要

本調査区は、京都大学医学部構内の南東隅に位置し、吉田橋町遺跡に含まれる（図版1-505、図5）。ここに、がん免疫総合研究センターの新営工事が計画されたため、発掘調査を実施した。調査面積は、約1400㎡、調査期間は、2021年12月13日から2022年5月6日までである。発掘調査の結果、縄文時代の自然流路や中世の土器溜・井戸、中世から近世前半にかけての土取り穴、近世後半から近代の溝・井戸などの遺構が検出された。それらのうち、土取り穴からは、古代の土馬、鋳型や轆の羽口など鋳造に関するもの、近世初頭の黒織部梅鉢文沓茶碗といった特徴的な遺物がみついている。発掘調査の成果は、2021・2022年度の年報の第2章において、すでにまとめられている。けれども、諸般の事情により、めぼしい遺物のすべてにわたって吟味することが叶わなかった。よって、ここに、それらを取りあげて、いろいろと検討した結果を報告していくことにしたい。

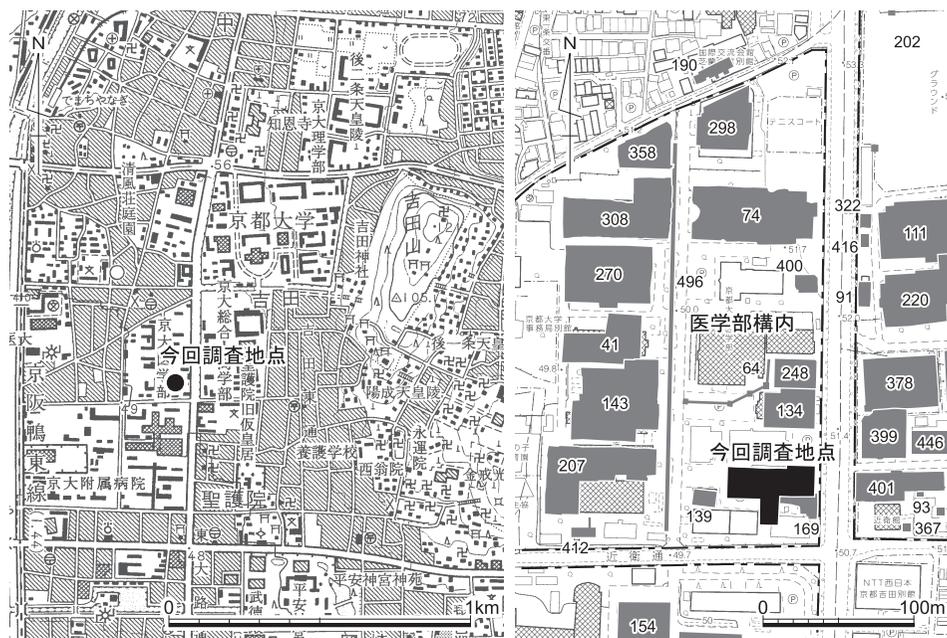


図5 調査地点の位置（左1/25000、右1/5000）

2 縄文時代の遺構と遺物

前年度の報告で説明されているように、縄文時代に形成されたと考えられる自然流路(S R 2・S R 3)が調査区の西辺で検出された。S R 2は、幅が0.6～1.1m前後、深さ0.6mほどの小流路で、走向は北西から南東方向である。白色粗砂で埋まっていることから、白川系の流路と判断できる。S R 3は、幅が0.7m前後で、S R 2と直交するように、北東―南西へ伸びる。S R 2から分岐した小流路と考えられている。S R 2・S R 3は黄灰色シルトを切って形成されている。この黄灰色シルトは医学部構内から病院構内の東半に南北に帯状に分布しており、中世以降におこなわれた土取りの対象となった堆積物である。

縄文時代の遺物はS R 2・S R 3から出土したものと、歴史時代に形成された包含層から出土したものに大別できる。いずれも縄文土器で、S R 2・S R 3出土土器も器面が摩滅しているものもあり、プライマリーな状態を保って出土しているとは言いがたい。

S R 2出土遺物 (Ⅱ 1～Ⅱ 19) Ⅱ 1～Ⅱ 3は有文の口縁部。Ⅱ 1は口縁部からやや下がった位置に沈線を横走させ、R L縄文を施している。口縁端部は内側へやや湾曲し、丸くおさめている。Ⅱ 2は外傾しながら立ち上がる口縁部資料。口縁端部を内外に肥厚させる。口唇上に1条、口縁部直下に3条の沈線が横走し、3条沈線の下端から、やはり3条1組の沈線が垂下している。劣化しておりはっきりしないが、縄文施文はないようである。Ⅱ 3は口縁端部を欠損している。1条の沈線を横走させて口縁部と頸部を区分している。口縁部をめぐる沈線はクランク状に上へ折れ曲がって、口縁端部へと抜けている。

Ⅱ 4～Ⅱ 9は有文の頸胴部資料。Ⅱ 4は3条以上の沈線束で、沈線の末端を入り組ませながら、横位に展開する曲線文様を描いている。L R縄文を充填している。Ⅱ 5は頸部で条線文を垂下させている。Ⅱ 6は頸胴部の境に沈線を1条めぐらして区画線とし、胴部に多条沈線を縦位に施している。Ⅱ 7は胴部片で、3条1組の沈線が垂下し、それを横につなげる沈線がみえている。Ⅱ 8は頸胴部の境に沈線を1条めぐらして区画線としている。頸部は無文のようで、磨いて仕上げている。Ⅱ 9は胴部片で、劣化によりはっきりしないが、L R縄文を施文しているようである。

Ⅱ 10～Ⅱ 13は無文の口縁部、Ⅱ 14～Ⅱ 18は無文の頸胴部資料。Ⅱ 10は口縁部が内側へ折れ曲がる。Ⅱ 11は口縁部が肥厚する。角閃石を胎土に含み、暗褐色を呈する。

Ⅱ 19は、平底の底部がいったん立ち上がってから外傾する胴下部へと続く。底部はほとんど残存しないが、縄代になる可能性のある圧痕が認められる。

縄文時代の遺構と遺物

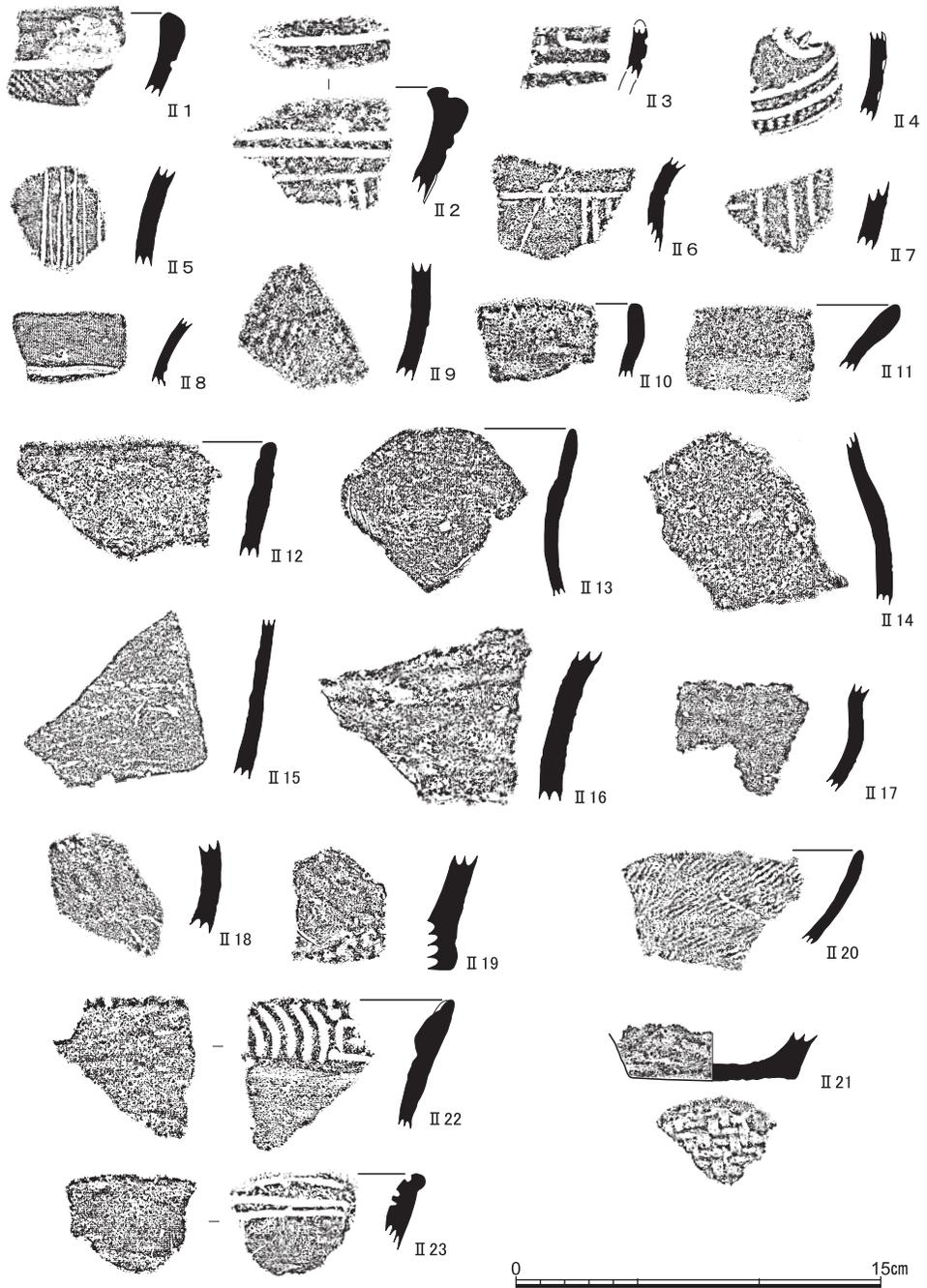


図6 縄文土器(1) 縮尺1/3

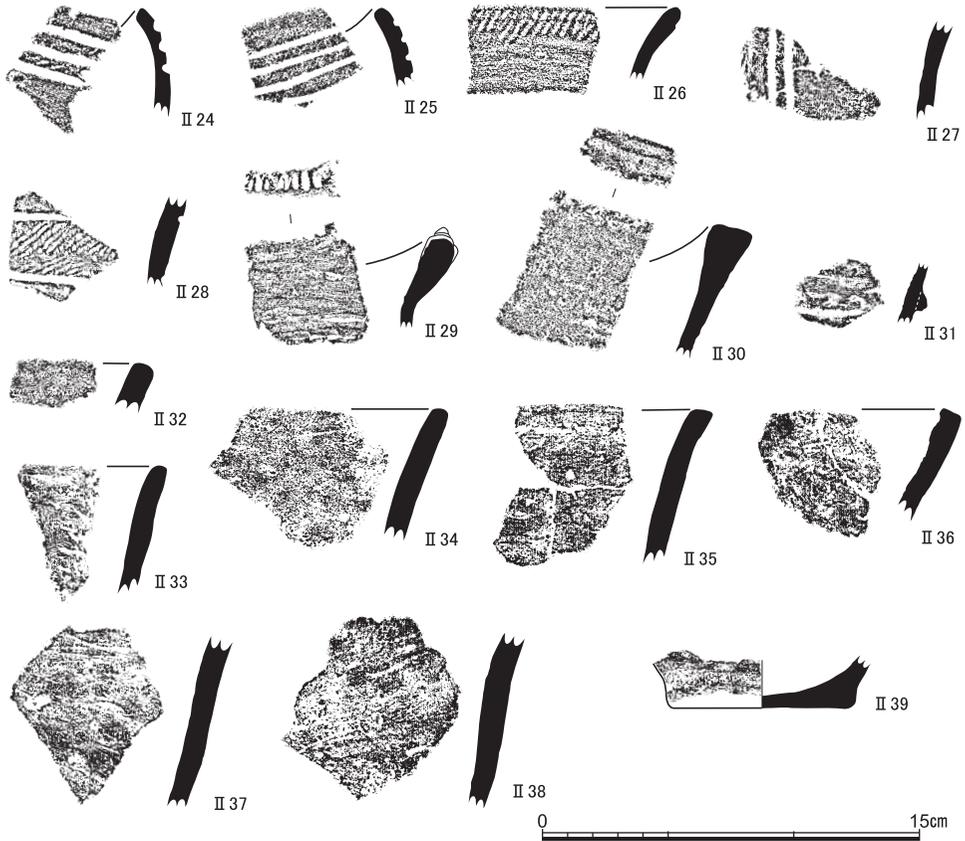


図7 縄文土器(2) 縮尺1/3

型式の判別できる資料は、Ⅱ1が後期初頭の中津式、Ⅱ2は後期初頭～前葉の福田K2式～四ツ池式、Ⅱ3～Ⅱ7は後期前葉の北白川上層式1期～2期に比定できる。

SR3出土遺物(Ⅱ20・Ⅱ21) やや内湾しながら立ち上がる浅鉢。口縁部から体部に、LR縄文を幅広く施文している。Ⅱ21は網代底の底部。網代は幅4mmの扁平材による2本超え2本潜り1本送りである。Ⅱ20・Ⅱ21ともに、北白川上層式の時期であろう。

歴史時代包含層出土遺物(Ⅱ22～Ⅱ39) Ⅱ22・Ⅱ23は口縁部の内面に文様を描く縁帯文土器。Ⅱ22は内面を肥厚させて、主文様として弧線文を配して、その間を長方形の区画文でつないでいる。Ⅱ23は肥厚させずに3条の沈線を横走させている。Ⅱ24・Ⅱ25は口縁部が内湾する波状口縁深鉢の口縁部とみられる。Ⅱ24は口縁端部を面取りしている。3条1組の沈線をめぐらせてLR縄文を充填している。Ⅱ25は口縁部外面に3条1組の沈線を施して、LR縄文を充填している。沈線束の下位には、さらに断続的な沈線がめぐって

いる。Ⅱ26は口縁部外面がわずかに肥厚して、そこにLR縄文を施している。角閃石を胎土に含み、暗褐色を呈する。Ⅱ27は頸部で、3条の沈線が垂下する。Ⅱ28は上下を沈線で区画したなかに、LR縄文を充填している。Ⅱ29は頸部がくびれる深鉢で、口縁端部に縦方向の刻みを施しており、向かって右端に向かって口縁部が内外に肥厚していくので、突起をもっていたと考えられる。Ⅱ30は頸部が外反する波状口縁の深鉢で、内外に肥厚する口縁端部を浅い凹線がめぐっている。Ⅱ31は凸帯文土器。胴部資料で、断面三角形の凸帯を貼り付けて、D字状の刻みを施している。

Ⅱ32～Ⅱ38は無文土器で、Ⅱ32～Ⅱ36は口縁部、Ⅱ37・Ⅱ38は胴部資料。Ⅱ39は直径7.5cmの平底の底部。いったん立ち上がったあと、外へ向かって開いている。

歴史時代の包含層から出土した土器は、Ⅱ31が晩期末の長原式に比定できるが、それ以外で型が比定できるのは後期前葉～中葉の土器である。Ⅱ29・Ⅱ30は縁帯文成立期、Ⅱ22・Ⅱ27は北白川上層式1期、Ⅱ23・Ⅱ26・Ⅱ28は北白川上層式2期、Ⅱ24・Ⅱ25は北白川上層式3期に比定できる。

小 括 今回の調査で出土した縄文土器は、1点出土した晩期末の土器を除くと、縄文時代の流路より出土した土器も歴史時代の包含層に混在していた土器も、後期前葉～中葉の北白川上層式を中心とした時期のものが主体を占めていた。先史時代の医学部構内から病院構内一帯は、高野川系流路による砂礫が基盤層を形成するとともに、白川扇状地の末端にあたり、白川系流路による堆積物が交錯する複雑な堆積環境を示している。白川系自然流路SR2・SR3のベース面となっている黄灰色シルトは高野川系流路によって形成された南北に伸びる凹地が高野川系流路の西への移動にともなって凹地内に粘土やシルトが堆積して形成されたと考えられ、その堆積物の上部の年代は約6300年前（縄文時代前期前半）とされている〔清水1991〕。

今回みつかった黄灰色シルトを切る白川系の流路は、病院構内155・191・278地点など周辺地区の過去の調査でも複数の地点で見つまっている。これらの流路内から出土している土器は、早期・前期といった古い時期の遺物も含むものの主体は北白川上層式（1期～3期）で、それ以降の時期のものを含まないため、流路の形成時期を後期前葉～中葉ごろに考えてよいであろう。今回の出土状況同様、出土土器の大半は二次的な移動を受けていると考えられるので、縄文人の活動実態を直接反映しているわけではない。ただし、流路の肩部に遺棄した状態でみつまっているものもあるので〔千葉1991〕、低地部における当時の人間活動に注意を払って調査を進める必要がある。

3 弥生時代～古代の土器

弥生時代以降平安時代までの資料は、すべて本来の時期の遺構にともなうものではなく、中世以降の土取り穴埋土や包含層への混入出土である。ただし、遺存の良さは時期により若干の違いも看取される。以下、図示可能な主要なものについて、おおむね時代と種類にわけて紹介しておく。

弥生時代の土器（Ⅱ40～Ⅱ50） 前～中期の破片も散見されるが、遺存の良いものは後期後半～終末期（庄内式併行期）ころに目立っている。

Ⅱ40は斜め上方に直線的に開く口縁部で、凹線文が施されていたかとみられる凹凸がめぐるが、全面が磨滅しており詳細ははっきりしない。中期後半の可能性ある資料としておく。Ⅱ41は広口壺の口縁～胴部上半にかけてで、複数の破片がある。胴部は球状に強く張る形態になるとみられ、そこから外反する口縁部が積み上げられる。特徴から後期後葉だろう。遺存も良く、胴部外面は全面篋磨きされている。Ⅱ42も同時期ころの壺の頸部付近とみられるが、やや口縁にかけての外反がゆるやかである。遺存は悪く器表面の荒れが著しい。Ⅱ43は壺の頸部から水平に近く屈曲する口縁部とみられ、器壁は厚い。擬凹線を施す端面に縦位の棒状浮文を飾るが、ほぼ剥落している。水平に移行する屈曲部上面にも擬凹線が施されており、そこから頸部側へは弱く内彎気味となる。内面側のみ全面に、赤彩が剥落したような状況が看取される。尾張地域で弥生時終末期ころにパレススタイル壺と呼称されている壺形土器の口縁～頸部に相当する器形の特徴を備えており、搬入品の可能性が高い。Ⅱ44は後期の甕の底部で、外面は叩きが螺旋状にめぐる。Ⅱ45は多条の細い沈線が施される胴部片。前期末～中期初頭の壺である。Ⅱ46は櫛描の流水文らしきモチーフの一部が残る小片。中期前葉ころの壺だろう。Ⅱ47は、外面に櫛描文を施す厚手の口縁部で、器表面が荒れており鮮明ではないが、上段に直線文、下段に波長の短い波状文が重ねられる。鈍角に屈曲して斜め上方に立ち上がる器形で、終末期ころの外面を加飾した二重口縁壺ではないかと思われる。Ⅱ48は無文で全面に篋磨きがされる胴部片。遺存は良い。Ⅱ41やⅡ42のような後期壺の胴部と思われる。Ⅱ49は櫛描文を施す壺胴部片。直線文の間に繊細な右下がり斜位の櫛歯刺突が施される。終末期ころの近江～東海地方に卓越するモチーフであろう。Ⅱ50は小さな平坦面をもつ底部。やはり終末期ころの小型壺の底部であろう。

古代の製塩土器・土師器（Ⅱ51～Ⅱ61） Ⅱ51～Ⅱ55は奈良時代の製塩土器口縁部で、わずかに内彎する形態をとる。砂粒を多量に含み、きわめて厚手である。総じて遺存は良

弥生時代～古代の土器

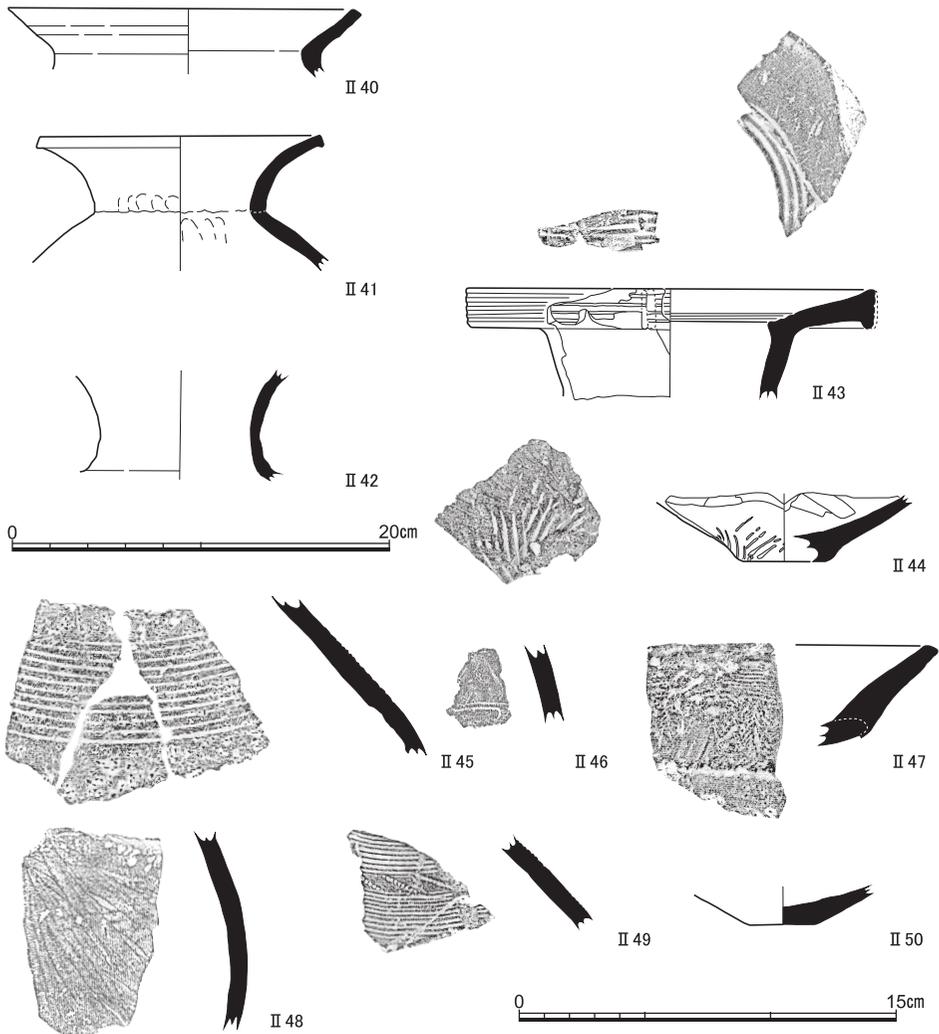


図8 弥生時代の土器 II 40～II 44：縮尺1/4，II 45～II 50：縮尺1/3

く、II 51は桃白色を、ほかは濃い赤褐色を呈する。

II 56～II 60は甕の口縁部。さまざまな口縁形状が認められるが、短く外反する形状のII 57、口唇部が短く内側に巻き込む形状のII 59は平安時代の、ほかはそれ以前の飛鳥～奈良時代のものであろう。II 58の口縁部は内彎気味に立ち上がる形状で、鏝状に近く外反する口縁部のII 60とともに、長胴を呈するものであろう。

II 61は奈良時代の杯口縁部で、口唇部は短く内側に巻き込む。II 62は同じ時期ころの高台をもつ杯B。両者とも赤褐色の精良な胎土をもつが、残存範囲に暗文は観察できない。

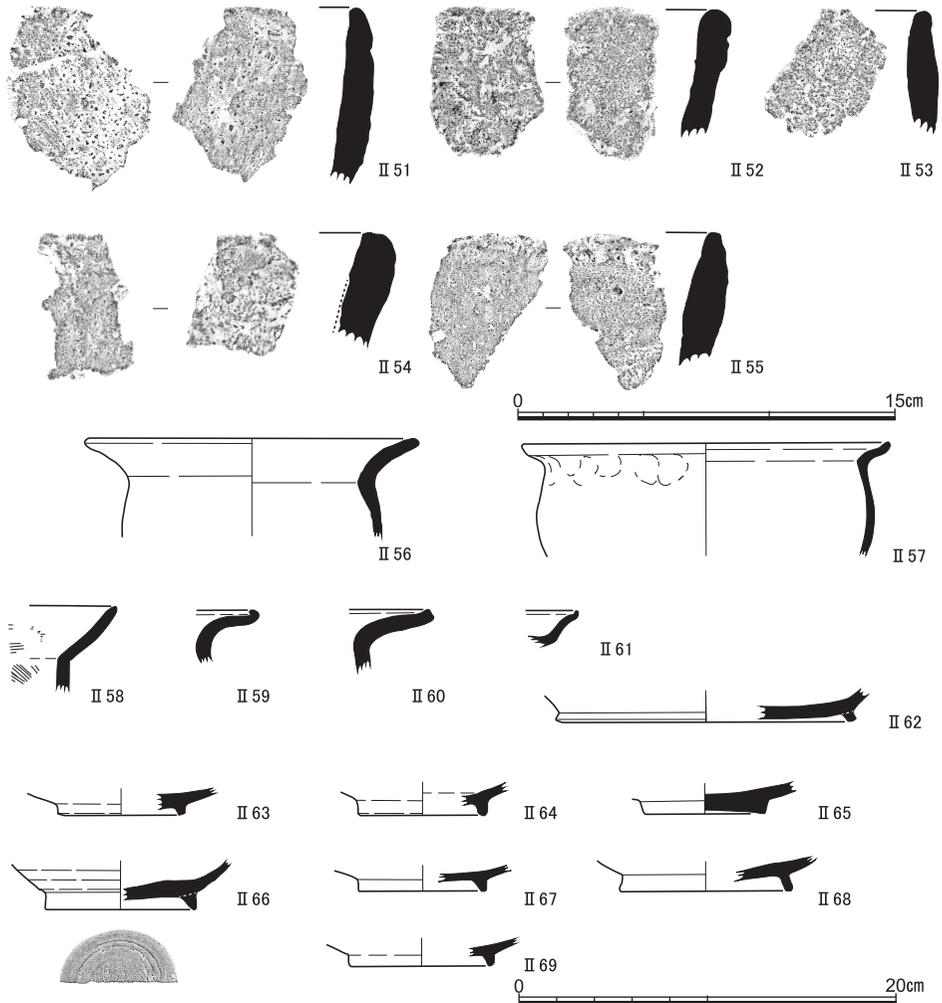


図9 製塩土器 (II 51~II 55)・土師器 (II 56~II 62)・緑釉陶器 (II 63~II 65)・灰釉陶器 (II 66~II 69) II 51~II 55: 縮尺1/3, II 56~II 69: 縮尺1/4

緑釉陶器・灰釉陶器 (II 63~II 69) II 63~II 65は緑釉陶器の底部。いずれも軟質の焼成で淡緑色。II 63は削り出し, II 64は貼付の高台をもつ。II 65は削りにより円盤状を呈する。II 66~II 69は灰釉陶器の底部。いずれも貼付による高台をもつ。断面三角形の丈高なものII 66から短く三日月状に内彎気味のものII 69まで, 各種がある。以上の緑釉・灰釉陶器は平安時代中~後期の製品であろう。

須恵器 (II 70~II 109) 古墳~平安時代にいたる各時期のものが認められる。

II 70は口縁~胴部下半までの1/4ほどが遺存する甕の大破片。頸部から短く立ち上がる

弥生時代～古代の土器

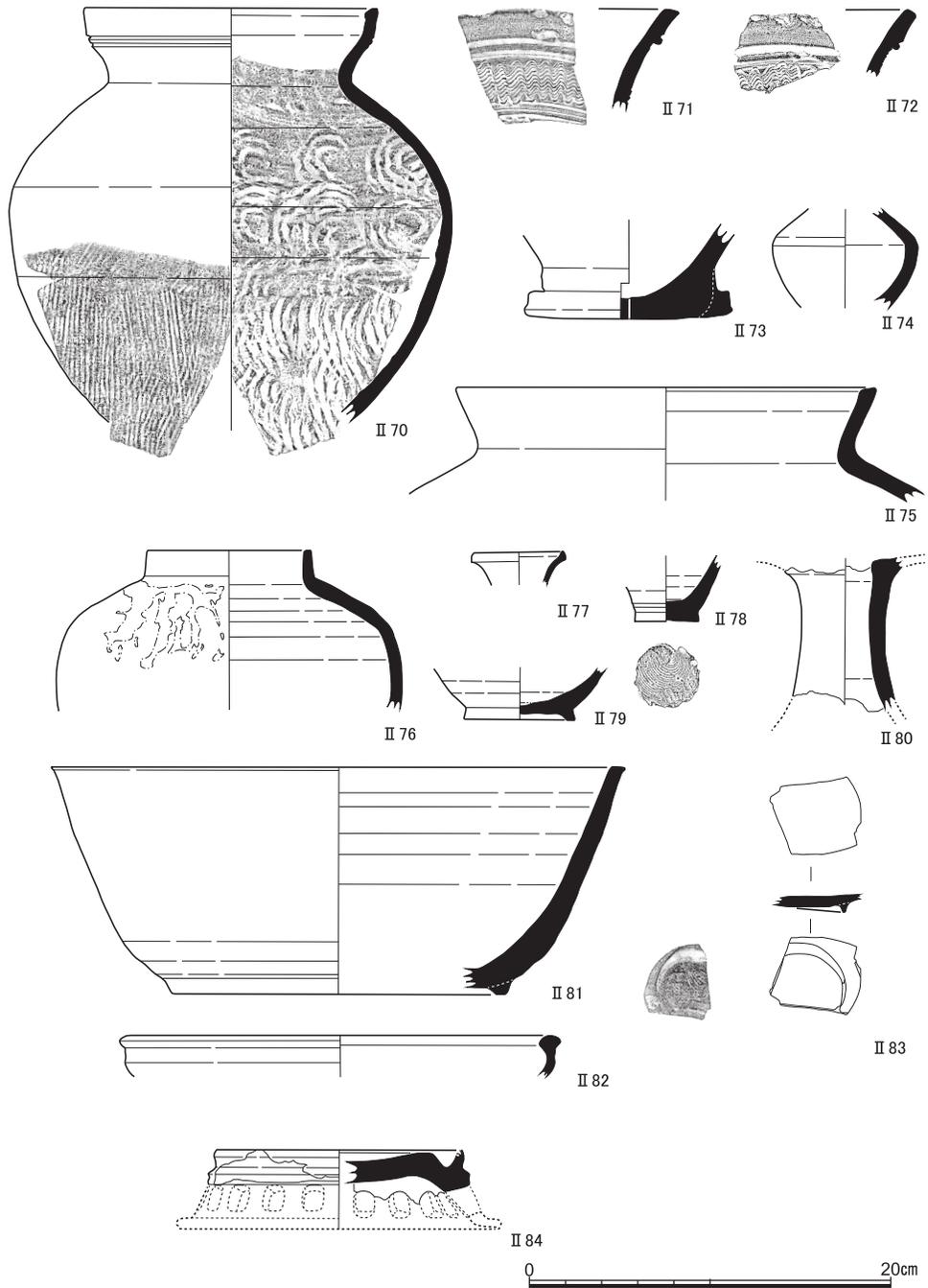


図10 須恵器(1)

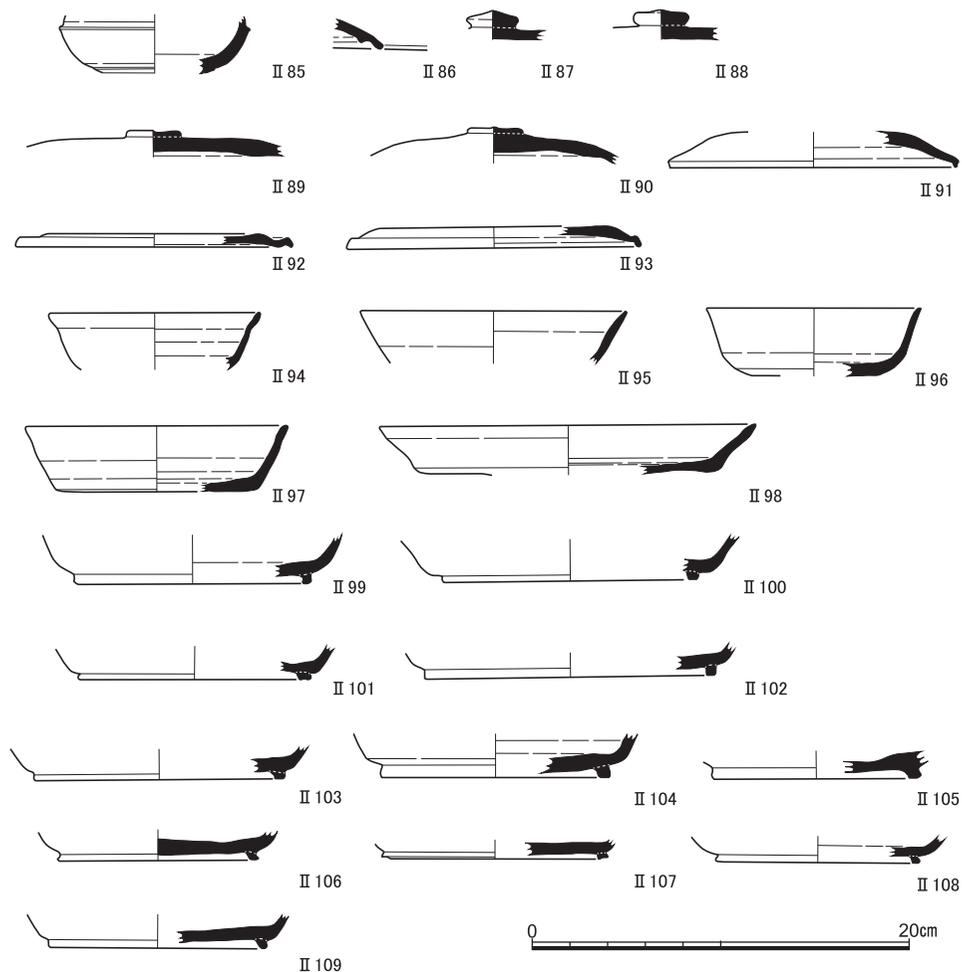


図11 須恵器(2)

口縁部をもち、屈曲部に2条の沈線がめぐる。内面全面に青海波の当て具痕、外面の上半は丁寧に撫で消されるが、下半には平行叩き痕がのこる。II 71・II 72は強く外反する口縁部片で、外面に櫛描波状文を施す。甕ないし器台だろう。II 73は、鉢などに分類されているコップ形のものの底部で、厚手の底部まわりに粘土を貼付けて鏝状としている。中心部付近には径1mm程度のごく細い焼成後穿孔がされる。II 74は隼の胴部。小ぶりの製品である。以上はおおむね古墳時代後期～終末期の6～7世紀代のものであろう。

II 75・II 76は口縁が短く直線的に立ち上がる壺。II 77は壺Gなどと分類されている小型

壺の口縁で、Ⅱ78は糸切り痕をもつその底部。Ⅱ79も壺の底部で、外側に踏ん張る高台をもつ。Ⅱ80は高杯の脚で、柱状部が遺存する。Ⅱ77・Ⅱ78は平安時代、ほかは奈良時代であろう。

Ⅱ81は厚手の器壁をもつボウル型の鉢。口唇部は平坦な面をもち、底部は低平な高台を貼り付ける。硬質の焼成で灰白色の色調を呈する。東海地方の製品だろうか。Ⅱ82は玉縁状に肥厚する口縁部で、平安期の篠窯産の鉢。

Ⅱ83は小さな断面三角形の高台を、焼成前に斜めに切り落として斜台とした底部。見込み側は平滑になるとともに墨が付着している。硯として当初より製作されたものだろう。薄手で灰色を呈するので、須恵器ではなく灰釉陶器である可能性もある。

Ⅱ84は円面硯で、脚部は逸失しているが、陸の中央が弱く凹む硯面部の1/4程度が遺存する。硯面の外径は約14cm。脚の形状はうかがえないが、遺存している孔の上辺からみて、わずかに丸みを帯びる方形ないし長方形の透かし孔が16箇所めぐっていたものと復元される。京都大学構内での円面硯の出土は初例となる。奈良時代のものであろう。

Ⅱ85～Ⅱ109は各種の杯と蓋類。Ⅱ85はかえりをもつ杯身で、5世紀代の可能性がある。Ⅱ86はかえりをもつ杯蓋で7世紀ごろの製品といえる。Ⅱ94～Ⅱ96のような薄手小型で口唇部を尖らすような形状の杯身が、この蓋に対応する身だろう。ほかはいずれも奈良～平安時代の製品とみられ、蓋には、しっかりとした宝珠つまみをもつⅡ87・Ⅱ88と、つぶれて扁平化したつまみのⅡ89・Ⅱ90がみられる。身には、Ⅱ97・Ⅱ98のような高台をもたない杯Aもあるが少数で、外に踏ん張るようなしっかりとした高台をもつ杯Bが中心となっている。

小 結 以上、本来の遺構を離れた遊離資料ではあるが、抽出できた弥生～古代の出土遺物の主要なものについて報告した。冒頭にも触れたように、通時的な出土をしているが、弥生時代後期～終末期と奈良時代ころについては遺存の良い資料が量的に目立つ。土取りにより破壊された遺構や包含層の遺物とその埋土中に含まれているとして、遺存が良好である遺物は、それほど距離を隔てたり複数の移動を経っていない可能性を示唆すると仮定するならば、医学部構内周辺におけるこれらの時期の遺跡存在に注意を払っておく必要がある。

弥生時代に関しては、今回調査地の北に隣接する64地点における立合調査で、遺存の良い弥生後期後半の土器出土が報告されている〔樋口ほか1980 p.5〕。今回の土器出土とあわせて、一帯にこうした段階の小規模な集落や墓域の単位がひろがっていた蓋然性が高ま

ったと言えるだろう。

また、奈良時代に関しても、調査地の北方200mの74地点で二彩釉陶器の出土が知られるほか〔清水・吉野1981 p.16〕、南方100～200m程度の病院構内の調査において、7～8世紀代の遺構遺物が見出されている〔五十川^{ほか}1989 pp.10-11〕〔浜崎^{ほか}1993 pp.11-12〕。かねてより、吉田南構内から本部構内にかけて奈良時代の遺構が散発的に確認されることは注意されてきたが、今回の成果を考慮すると、それらは西南方の医学部・病院構内へも線的な分布傾向として続いているとも見なせよう。交通路の位置を考える上でも示唆的な状況であり、今後そうした問題意識で周辺一帯の調査を注視していく必要性を指摘しておきたい。

なお本章は、1を笹川、2を千葉、3を伊藤が執筆した。